

藝備孝義傳

佐伯山縣

卷三

庫	文	閣	內
一五八函	七冊	三四二七六號	和書類

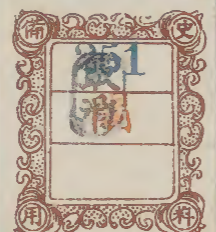
安藝

家傳

山陽道九

續編孝義錄料

七十二



內閣文庫	番號	和	34276
	冊數	7 (3)	
	函號	158	29

共七



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



10201

Faint, illegible text within a rectangular border on the left page.

Small handwritten marks at the bottom of the left page.

Small handwritten marks at the bottom of the right page.



藝備孝義傳二編卷三

安藝國佐伯郡

嚴崎折言信

同大西町海老坂登茂助

同牛王前町小濱登格次 同魚店町惣七

附同魚店町十之傳妻

能美崎大原村道格

大野村久花 同村長六

地味前村惣七同妻三

能美崎中村五席口下人泣八

嚴崎榎屋八後家子き

原村与左衛門

同村庄七

嚴崎播磨屋仁右衛門本代源八

屋代村よ收 津田村七九席妻す

安藝國山縣郡

戸谷村茂七

本地村源次郎

戸河内村土居原組甚茂

大朝村平江席

同村貞七同妻か收

同村助六同妻うよ

同村清十席

土橋村道益同子松益

中祖村吉席言席

有田村怡仙

極田大徳寺
 中興
 上林
 四林
 四林
 六
 平

藝備孝義傳二編卷三

佐伯郡

○嚴嶋誓信

いつくしまよひとりの心若ありはよ、
 つまよよまよぐの調度をほりて人よあつよそれ
 のころらずさう居るふの彦室よりその餘の僧
 房もさづから修理することすくちりた又古き
 舟をかりさうく井げたをつくりあらたあ石
 壇もさうさうとさうさうきいだして人これを使



とよむりこふことかぎりありしその身は僅に飢
寒をまぬるゝぞかりよて人のためよ力を尽し
骨をくゞいりやきぬい老よの奇特のことあり
とて寛政三年六月賞して銀貳枚をたまはり
ける。

○嚴崎大西町海老坂屋武助

武助の父死したる時兄のこみ出て人よ仕ふ渠の
末の子よて七支よあり親母よをひあつりしが
いとけなまきよりのやうに志ありてはぐりよふよ

ゆき、葉かりて、市よひさき、又人のためよふづらひ
るどして母をやゝふかれが十七のとき母有
頼ありて、回必通話よせよしひけれと、縁の
用度もあまよき同伴もあらざれば武助おのひから
らひあつりううもして母志とげえさせし
とひさきあていひさきづら子供してめぐりあめと
いひてやがて打つれおけるうづらあまく廻りて
かりけれは母あまくすりこひぬ母又これ六
十よあるとてかゝるらば伊勢多あせせよと

いひければ武助がしまりそれより已がたをこ
 すよふをやめて日よふそのあひひをたふそく
 年をおさねてのこ一五つその年よりぬれ
 然いとさるゝて伊拙ももるひまりける妻
 子もありて餅をうりぬるが家の形まづしうり
 けるよかれが兄の某方やましくて世をさたり
 かねければ武助もましくたすけやりぬ又ゆるりの
 ものよを真しくくる一めるものありけるをさう
 方よよびとりて二人中ぐそとてぬ今の家の

内すべて八人ありとり寛政三年十月廿二日銀
 貳百五をたすりる。

○嚴嶋牛王前町小波屋格次 ○同魚店町惣七

附同魚店町十妻

格次の勘六が子あり兄弟五人をけるが勘六死して
 後僧ももるりぬひとり格次の母よをひめて平
 日ハ館をうりありき會たつ以よハ昼夜戲單を
 うりて母をやしるよかれが十一支の以より母病を
 うけて時くさむむこと甚しければ格次よかく

かきしゝてふがら、神よいのり、佛よねがひつゝ、病
 おらりし時の、昼夜あつくまもる、やまひをこられば、
 出て、あめをうり、ゆ神系詣の旅人と、えゆれい、引來
 りて、やどをおす、それも、家まづしく、夜のものゑど、
 うるさければ、よきこ人のとすまらざりければ、かれが
 いとけるまうして、母をたすけ、まらづ、おとさしく、
 えゆれい、約せし店跡のおま、物やる人おやわり
 ける、母かく、おのりのちを、つまぐこと、金く、ゆ神
 のゆかげされり、一日も、とすまらざり、あいらすと

のひければ、格次、それより、市社いづまうづること、一日も、
 をこらるること、母の八年をわり、病まづらひ
 けるが、近頃の、やまひ、癒ぬれど、難よりい、そや、く
 おとらりし、心も、おらりよ、まらりて、格次、事ありて、志なく、
 廣崎いづらるよ、何ましくも、えうせ進らせんといへば、
 いらくの人形をのぞむ、いつも、そののぞめるよ、を、
 買って、あづければ、母より、こび、たまらざるごと、して、
 もて、あそびける、格次、今の二十支よ、こえければ、肉も、
 や、ゆたうよ、まらりて、母の、うら、いと、たのめり、と

いふ。又山子の内は、惣七とよぶあり。これも親孝
 なるを以て、格次とひとしく、銀百八十文たりける。
 武助と同じ目なり。又山子十文、妻ありして、
 一年もみこぶるよ。十文、夫あさからぬ打子して、
 床もつきけるよ。は妻、うやまひ養ふさま人、又て、感
 ずるものおろし。これも、寛政三年七月七日、鳴子の
 より、米四俵あつてけるよ。

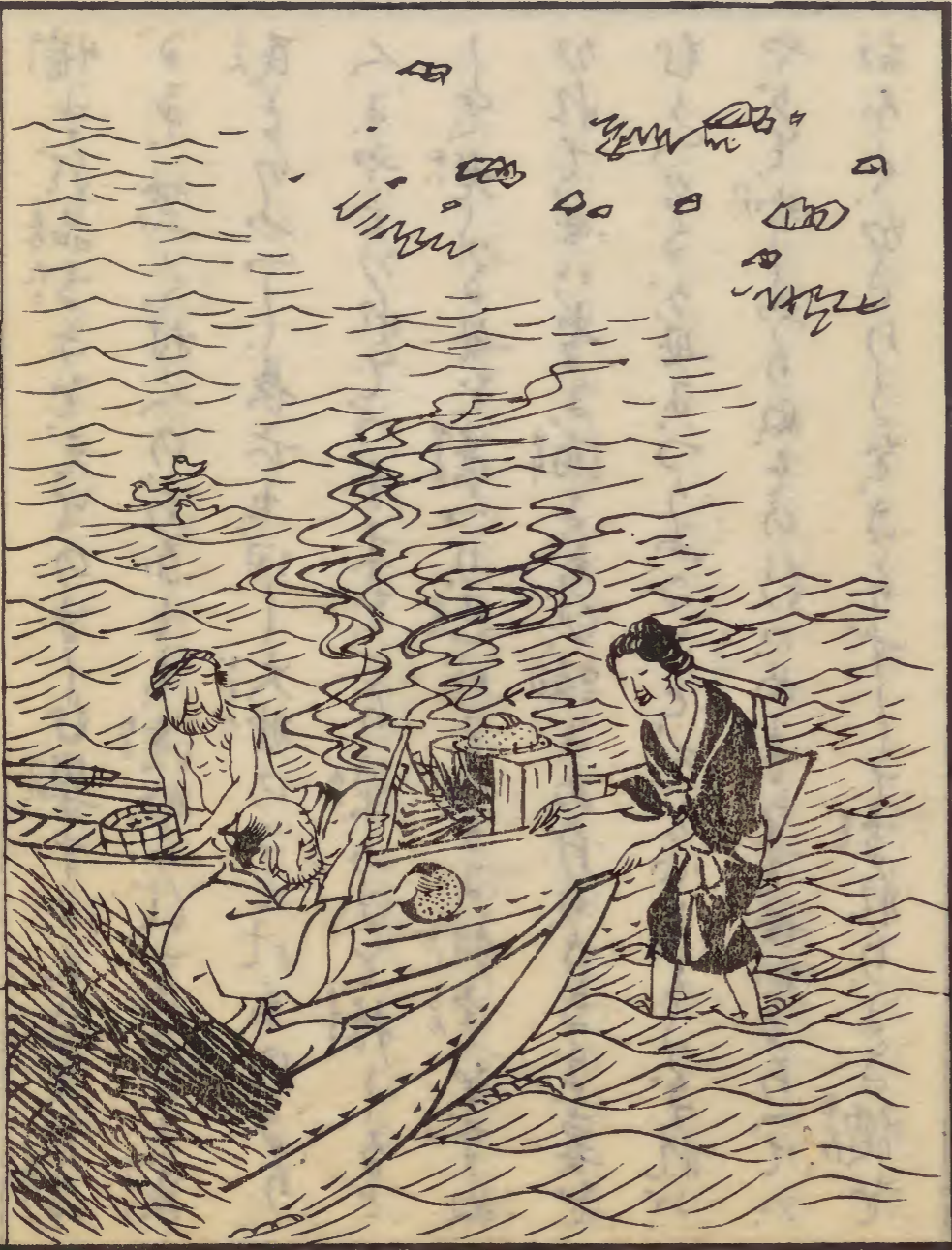
○能美崎大原村道格

道格の醫師なり。老母を、つうて孝なり。家業のこと

まげき、時ととも、こまなりよ。ころを、こむりて、母出
 れど、隠ひゆき、いぬれ、の、孝を、まうく、家の内人、
 一き、とも、あら、いれど、人よ、まかせ、て、心、やす、
 ゆへ、りや、常、よ、才と、くる、し、め、カを、つく、て、つ、く、
 その外、親族、よ、む、つ、す、く、朋友、も、ま、さ、り、か、り、
 寛政五年癸丑正月十八日、銀貳枚あつて、賞せらる。
 及、格、が、妻、も、才、も、ま、さ、り、皆、孝、心、あり、とり、お、同、一、
 七月廿一日、及、格、孝、養、を、こ、た、ら、る、よ、一、
 銀貳枚、く、つ、り、れ、る、。

○大野村久花 ○回村長六

久花は、大野むらの貧民なり。母年木い目志ひくれは、
 久花ことよしのこをりて養ふ。母のこころをさぐらふめ。
 佛寺にも志むくおひまりぬ。渠いさつかるる船を、
 もてり常まばつとて。廣徳よいつる。さそ度こそよ。
 母いのつゝかこくりわつし。妻よをうつていでぬ。
 妻もよきものよといとねんこころよあつゝひなる。
 久花いりつも。母が好めるものをもとめて。ゆり
 ける。たむこいことよ。ささるるふされば。常ま。價を



惜まば品さきをえてのすむ渠まこたきてをぢ
 る事。堅く村人のおあとも、淺からばまことよ良
 民とりあし。長赤も、回一^{おれの}大蛇のうとれものより。
 人よ、やとりれて、つま本をこり、柴あひを、採一^{せき}るど
 して、老^{おい}る母を、寄^{やか}つり、己^{おの}の、こつらみ、飢^うきを、すぬ
 かれて、母^は、孝^まよ、酒^{さけ}よ、煮^いひ、飯^いよ、あけの、さきつよ、妻を
 むう^らるが、母よ、つらふること、己^{おの}が、心よ、も、こ、ぶ、れ、い、
 や、と、せ、^たや、り、ぬ、その、後、い、ぬ、と、ら、す、母、お、と、り、つ、て、い、
 お、り、く、か、こ、り、つ、と、を、さ、ら、ず、^まと、れ、り、よ、き、^{あひ}價、を

ゆることあとも、常^{とこ}よ、こと、とりて、び^ゆす、と、も、久、花、本
 六、ども、米、三、た、ら、づ、か、づ、け、ろ、よ、寛、政、五、年、七
 月、十、六、日、あり、こ、い、^こ國、老、某^{上田}、^主水、の、采、地、る、れ、い、
 か、の、家、より、も、あ、つ、り、よ、ひ、と、く、米、錢、を、あ、つ、ら、る、
 久、花、よ、い、回、一、十、一、年、七、月、廿、一、日、本、府、より、又、米、三、俵、
 くら、さ、れ、る、母、程、さ、ら、つ、て、孝、養、を、こ、た、ら、ぶ、る、と
 以、て、さ、り、

○地^{ちの}市^ご前^{ぜん}村^{せん}惣^{そう}七^{しち}回^{かい}妻^{さい}さ^さつ

惣^{そう}七^{しち}地^{ちの}市^ご前^{ぜん}村^{せん}の、惣^{そう}十^{じゅう}席^{せき}が、子^こさ、り、十^{じゅう}あ、ま、の、の、討^うより、

廣崎よ出て人よ仕ふ己が才の價も年よ増へて
うけるるがのこらず親のもとよ送りぬそれのこ
ららず跡しき物をいれはばせをもとめてつうか
けるされど心やまわらずやまけん遂まつくを
やめてゆり養ふ家貧しく田畠もさげれば父が
業をつぎて日ごとよ魚をうりあるき力をま
めて親の衣食をいよるむ妻をむうつて若をば
さるといふこれも心やまわすきものよて舅姑よ
よくつうよまの物十席も魚魚うりて近き村

里へい海へひけるが日よよりて熱七すりも海へ
れば熱七いふわどつかるといふとも必路までむうよ
すかりて盤をうけやりどもさひゆればさう盤よ
ゆをたくして出てむうくさもくよさうらつをさちちり
熱七父が足をあらうらさういらくおもものよのこしてさ
とれをすむすべて夫物か孝養のよまあせれる
こと限りするまらるよのこらよつら母物くるこ
ころりておくころひもことあり熱七の心も
いひすうてとれをまじむかきも一回はよの心

つうよ。さままぐ。すぢらるきさうども。りひかられども。よく
 うけあさぐひて。いさうかも。さよ。おこさび一日。姑。
 機はたきのいとを。箴はたきもとよりの。のこらうず。たちきりぬ。さう
 外からより。ゆり。これを見て。驚おどろきぬれども。あーも。うら
 むる心るく。又とかく。し。をりたてけり。孝あは敬けい深ふかき
 ものよ。あらす。い。かく。あるべき。寛政五年。癸
 丑。七月十六日。夫ぬ。米五俵。賣し。なる。

○能せう義ぎ崎さき。中なかつ村むら五ご席せき。下した人ひと。徳とく八はち。
 徳ハハ。ハ。廿にじゅう時じより。その村に。後のち助すけとり。よものよ

仕つかふ。この家いへ。債たひ通か。ね。はく。出で基もとて。田で宅たくの。ら。ん。人。
 子こ。嫁よめ。徳とく八はち。ふ。く。これ。を。さ。げ。き。ある。人。の。も。と。
 すり。銀ぎん子すを。かり。田でを。及およむ。畝せ。買かひ。か。へ。て。その。側かた。に。
 家いへを。作り。主人しゅじんを。住すまし。め。徳とく八はち。耕かき。比ひ。て。その。家いへを。
 ち。ご。く。こ。又。人ひとも。も。や。と。を。れ。較くら。文ぶん。いと。ま。か。く。いと
 る。ま。たく。も。て。四よ年ねん。を。わ。り。の内うち。よ。遂つひ。な。か。の。銀ぎん子す
 も。返かへ。し。す。ま。し。ぬ。を。づ。て。村むらも。も。その。志こころを。あり。れ。こ。
 け。もの。を。や。と。る。時とき。の。債たひ。より。外から。よ。物ものを。あ。た。つ。て。
 私わたくしの。用もち。よ。も。さ。し。め。んと。す。志こころ。う。る。よ。己おの。が。こ。と。よ。り。



つらむして主人の子に衣服などをどこのけり。
 泣ハかゝる人からるれい養子よせんとのぞむもの。
 すくろろろろろ。後助もすくろ。愚恵けれど。渠がつて
 承引せぬ。さらば妻をむろよとのけり。それもすく
 ろろろ。おける。後助年おいて。子いすく。幼少るれい。
 ろんち妻ありて。それをたすける。それ珠よ。やま
 かるべーと。いふ。泣ハさらばと。いふ。さよ。あつらひ。
 妻をむろて。力をありせ。はろつける。そのは。後助
 夫婦死す。子五郎。いすく。弱なるれ。泣ハ

れその家とさうずして、もり立、今いやくたくもいも
いできぬ、村長おこま、その忠勅を感して、あけ
くれい、米十五俵、ありりる、寛政五年、癸丑の七
月十六日あり、位八、まよ、仕、い、よ、むりて、四十八
年ありといふ。

○ 巖崎 樞屋 後八 後家 さつき

さつきい、京都、東洞院の、うすれ、あり、身と、うられ、て、妓
女と、あり、大坂の、新町、ま、ま、け、る、が、十六の、と、この
巖崎、よ、く、づりて、樞屋、某、が、肉、よ、つと、め、り、さ、ぶ、め、の

年、お、も、み、り、けれ、が、樞屋、後八、の、お、も、の、妻、と、あり
しが、年、三、十、二、あ、ま、る、に、夫、や、う、て、死、し、け、り、も、と
より、貧、し、く、家、よ、さ、だ、す、れ、る、業、も、あ、け、れ、ば、日、ごと、よ、
旧、主、樞屋、つ、り、て、人、の、衣、履、を、洗、ひ、す、う、ぎ、さ、ら、う、て、男
姑、を、や、う、ふ、男、の、十、と、せ、ど、かり、し、て、と、て、ぬ、今、い
姑、の、と、と、い、ひ、て、や、い、よ、く、あ、つ、く、つ、く、カ、の、を、よ、び、
や、う、ひ、ける、さ、れ、ど、糧、と、も、し、く、つ、き、か、つ、けれ、が
姑、を、く、う、ら、う、ら、う、又、旧、主、一、男、を、よ、せ、て、水、を、く、飯、を
か、き、つ、と、め、つ、り、て、姑、を、と、こ、ら、む、か、く、た、ち、あ、れ

ぬるこころ人のつこけるもや。おぼや。あるゆりの
 人より。おぼらく。海りのが。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 せこしけり。されど。姑の。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 まも。ありれよ。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 あつて。店の。うーろよ。姑を。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 うらよ。姑。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 ありけれ。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 昼夜。たすけ。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 事。の。あり。れ。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。

さしとて。かく。心の。ま。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 が。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 武。百。み。を。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。

○原村与左衛門

と。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 志。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 う。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 ら。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。
 廣。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。おぼや。

すべしと同伴の多くすめざるが父は約せしむ
たかへどとてやぐて馬をよとひてゆりぬ常のきき
めて儉約なるものなれど孝養のたまはりてい新も
費をいととらず父常より餅あまきけを好こなれが
一日もすめずとりよことあり一とせ父痲病を
やきてあやうくくんれいとなら大ききうれひ
およそ百三四十日ほど昼夜おびをとおかずして
ありやしうりおれ才は孫之節といひあり別家
してあつるがとなら孝養の力をいとおちてたすけよ

ハ一ぬ孫之節死して才ぬ甥姪をいひとるるが
妻子よいこととららず又秋とよ里正の輩拾田の
ためうらつれめぐることありとならいつも小豆飯を
そののてこれをむく教ひるふことと玉れり辞され
どもあつてやめずとのきよおもしくりく里正を以食
すの國恩を報ずるの一端なりとその人となり
は一事よてもいひたるが一寛政六年甲寅二月廿
五日米七俵をたまりる

○原村庄七

庄七も左馬つと同一日、孝を以て、米七俵を
賜^{たま}り、その状^{さう}を、描^あき、庄七の、宮内村^{みやうちむら}の
甚六^{じんろく}が、子^こをり、が、原村の、次郎^{じろ}左馬つが、むこ
宗子^{むねこ}と、まゐり、まゐり、父母^{ふぼ}よ、つゝ、て、孝^{かう}敬^{けい}も、つを、り
むけり、食^{たく}い、か、ま、ら、ず、精^{くわい}う、一、且、こ、の、こ、は、
こ、を、一、め、り、ぬ、れ、い、か、ま、ら、ず、よ、ま、ま、を、こ、に、さ、む
れ、い、か、ま、ら、ず、た、ご、こ、を、す、い、一、め、凡^{おん}平^{へい}生^{せい}父^ふ母^ぼの
ため、馳^ち走^{そう}ま、る、事^{こと}、す、れ、ま、る、客^{きやく}を、も、て、ま、り、が
如^{ごと}一、養^{やう}父^ふ女^{にょ}子^し五^ご人^{にん}あり、一^{ひと}人^{にん}は、庄七^{じやうしち}が、妻^{つま}を、り、

餘^{あま}ハ、こ、の、村^{むら}に、嫁^{よめ}一^{ひと}人^{にん}を、養^{やう}父^ふ死^しま、る、時^{とき}に、
も、て、る、ふ、の、田^た、歳^{さい}額^{がく}七^{しち}石^{しやく}六^{ろく}升^{しやう}、角^{かく}、式^{しやく}石^{しやく}七^{しち}斗^と八^{はち}升^{しやう}を、
家^{いへ}よ、い、め、跡^{あと}を、石^{いし}餘^{あま}の、田^た地^ぢを、い、れ、等^{らう}、死^し一
た、る、後^{あと}、日^ひ人^{にん}の、女^{にょ}子^しよ、ま、あ、ら、あ、つ、よ、と、い、ひ、
い、れ、い、母^{はは}、世^よを、ま、り、て、は、な、せ、や、ぐ、て、選^{せん}言^{ごん}の、ご、と、
田^た地^ぢを、い、く、一、と、い、ひ、い、る、日^ひ人^{にん}の、も、の、ご、も、い、く
む、く、も、ま、ま、地^ぢを、い、け、ん、す、り、ま、い、ふ、ま、り、
ま、親^{おや}の、お、と、い、ら、い、ま、り、れ、と、同^{どう}一、心^{しん}よ、り、い、び、ぬ、れ、ど、
な、七^{しち}、ま、ま、親^{おや}の、お、や、せ、よ、ま、ま、ま、ま、い、お、も、や、す、く

寐ることせぬぞ。寐ても。寐覚あしくさういふも。
 各送言よ。まうづうひて。田地をうけとり。まられと。
 ひこすらより。よふありて。皆やむことを。えせ。その
 志よ。まかせけること。程ほ進よ。のするところ。善
 行おほし。

○嚴崎播磨仁右衛門代源八

源八ハ防州戸村の産あり。十九才として。嚴崎よ
 あり。そのすや仁右衛門よ。つうして。子代とさり。なるが。
 その性義よ。あつしく。まよ忠あり。仁右衛門死



してその子の代もあらゆへ力をつくへぬぬ和の況
今の仁右衛門とつう七女も代をつぎきれはお後心
もとるきを源八あつく後見してもりつて家業も
つとめもげぬ業いとも志やめを造りぬるがその
近人とく病くれは源八又そのかりをもつとめ
雇夫のちすらすとせせとせとせとせとせとせとせと
徒よ遊山とせとせとせとせとせとせとせとせとせと
まうどのゆまの塔の宮とらゆみを一度もこえず
仁右衛門鄰家をかひて源八よあこりれバ一日

それよりつりしうそがの計はいたして心もましくして
とまわらぬ主人のためのことをおひてやうて又妻子
をも本家よすましめ下女下男の事をもせさせて
とあつみえたらきつて仁右衛門が子を教ひとせだて
くる家産も増せしめ近年仁右衛門ねがひま
りて銀子おやくとあげ家の面目をあらわし
子孫の長計をせしめ源八が功おやかるべしと
きこつて寛政七年乙卯五月九日受けて米十五
俵ある源八主人三代よりつうてはと一お十一年は

せよひぬとて

○屋代村よぬ

○津田村七九郎妻すて

よぬい久き病ぐむまめあり姉それぐしよ算甚子して
子も出来ぬるが貧窮よせまりて離縁しけり
よぬの家よきて孝順するりるがこれもその村の
甚セが方へ下女よゆしけり志るまよ父病よか
りて久くくづらひるをもよぬつとめれいとま
あれが志るくありてかん病す重くありていま
ぬぐひ昼夜つきとひて力をつくせし父の病死し

けりその後もせと母と姉とをいとせしみ夜草
履ももつらりこが力をくしめてをせしむを
たすること人のをよびかきまゐり好い心風の
こちあるをよぬみゆくうれひて厚く心をく
くるまの事をもたごひるくすくこらきけれが
まも親類のごとくするぬ人すぬよ嫁をすむる
ものあれど母姉の事をのこうれひおもひて強て
そい議をばもちひずとるり寛政七年十二月
米子俵下されける時よと三十一ありすてハ

津田村源四郎むさめりし七九郎が妻とるり。
舅父を唐つが老衰せしよあそれよよくつうふまつり
くれがこれも河財よ米五俵あつらふすすての年
三十二よあつりぬ。

山縣郡

○戸石村茂七

茂七父の刺殺し一信とりよ年あけて目くら
て中もおもめあつりよ叶のざりける家よ侍
産とるい歳よ三升もつる畑のこありいりて伏

臘をさくめづきされが茂七日よ人よやとをれ
るどしつかすうよ父をさるよ天ぬのまつりこ
世の中いとさびしくて人やよものもあつりし
うが笈あつりものを造りて父を背よあつりし
田をまのあつり食をむしきさるくおひめらり
しことありさつりあるよあつりれよあつ
くれが人えてこれをさむるものあり茂七こつて
親の上さきものとさつりし一日よも心安く
さつりせまらしくさつりあつりしあつりめ



又せんとの口惜くこそぬといふを。又びてこの
 老いこが子まていなりず。殊う佛うまてこそなりぬ。
 渠さへ居いづらひたり心たのしみて。少しも世よ
 ぬがらゝきことなりばと。その人よ。かゝりける。
 まことや。孝の口体を養ひんより。心志を養ふよ。
 ちうぐいおのよ。後七が孝のよ。その心志を。おし
 るへら。ちうぐい。寛政三年。辛亥。十二月廿七日。
 米を。あつて。賞するよ。

○本_見地_ち村_{むら}源_{げん}次_じ郎_{らう}

源次郎の茂七が子あり世の事あり心におれど
孝のなる志ありてなり夜もすがら蚊を
とらひ冬の曉も玉をまぐ火をまぐて父母を
やすくりぬむ家は田地をたがひ草履を
造りうりて親を養ふその造れるいと足若
しこれど買ふもの皆その孝の感とて過知
價をさづけたる中にも醫者怡仙とりよもの渠が
貧しくて孝あるをありれ米をこごとくを
かりぬ父死する時次男万花を呼て源次郎我を

やしるふこと甚厚し我これを忘れず汝今より
かれを親としてよくつよまわれよと遺言して
死しけるとぞ寛政四年壬子五月廿九日米三俵
を賞賜せらる。弟万花妹とあまこ皆良心あり
とあり。

○戸河内村土居原組志花

志花の母をいとをむの心ひとよあつて
くよ物いこらりてすしめきるものいよづら
あらめてきせ母が身をらうせしめず母昼寐し

つらんとあひ比ひ。すまきくひを。すて。至必ゆりて。
 あすまをいさをも。救ひゆれ。が。身をもて。母をあつて。
 家せまくれ。が。梁の上よ。たふ。かき。て。常よ。つま。おら。と。
 重なる。が。母の内よ。在。波りの。あつて。あげ。おら。し。す。
 こと。し。た。と。ひ。あ。や。す。ら。す。る。こ。と。を。も。く。と。も。母の。
 これを。い。て。あ。や。ら。く。お。も。り。ん。こ。と。を。お。れ。て。あ。り。
 又。母を。下。り。て。さ。き。ふ。よ。り。お。ん。こ。と。を。お。ら。か。る。
 こと。も。あ。ら。べ。し。その。心。を。も。り。お。ん。こ。と。を。お。ら。よ。そ。の。
 頼。ま。り。母。九。十。よ。ち。ろ。づ。け。が。甚。花。も。六。十。よ。あ。ま。れ。り。
 大かみ

されど。その。志。こ。し。も。老。い。い。よ。く。あ。う。寛政。四。年。
 八月。九。日。米。五。俵。が。り。り。ける。

○大朝村平次席

平次席の。権。左。衛。門。が。子。ま。り。菅。の。立。ぬ。み。を。以。て。家。の。
 養。と。す。その。う。す。り。なる。肉。より。も。親。の。好。める。もの。
 と。い。ひ。い。と。さ。る。進。め。ず。と。い。ひ。こ。と。を。し。父。八。十。よ。
 こ。え。て。身。ま。かり。ぬ。平次席。わ。た。し。こ。さ。げ。く。と。や。く。
 た。と。あ。る。よ。洞。き。見。守。人。こ。お。あり。れ。を。僅。か。一。ぬ。
 母。も。老。や。し。て。足。も。け。ひ。が。い。く。ち。ま。り。ぬ。れ。が。水。火。の。



ことごとひもなかられどと志おらくもかたがら側を離れず。
 某それころよあらんかぎりい清心やすうれと喜よいひ
 きうせかき笠をぬひつ。おもしりきせのがら物語ふどしよく
 母をぢぶさめぐる。寛政五年癸丑正月十八日。ちるび
 しく。米三俵下される。

○大朝村と七回妻かぬ

夫七ちちいちち傭つが子よかぬい下石村十助がむすめ
 るり。夫七つとまよらづ。憎つとまふりくとむ友達とむみむつましくいよく
 人のためみせ叶つり。かぬもたぐひままれる者よ

夫よ志こころひ舅姑よつこ志づらうも心をゆるすも
おち病つ久しく中風をやぬ貞七夫婦心のかぎり
これをいこもりその死をかうむす甚^{とまげ}深^{ふか}し
されど母がうれひておとらうまきりるんことを
りれて母をい何^{なに}とれとてするふぐさめくる母も
人よあつたかれらが孝^{かう}けをかり出てあみごを
おと^よ收^としとるん夫婦よ米五俵を多^{おほ}ひて賞^{あやう}せらる
平次帝と同一日ありとぞ

○大野村助六回妻さよ

助六い久右衛門が子までさよハハ右衛門がむすめあり
夫婦孝^{かう}義^ぎあるを以て貞七等と同日よ米五俵を
むりりぬ状^{じやう}よいそく助六かつて父をうしひ母
中^{ちゆう}と種^{しゆ}物^{ぶつ}をうれひて久しくうちやぬ夫婦力を
あひせてこれをいりるされど昼^{ひる}の田つる業^{わざ}の
すてかこかれは妹^{いも}ゆりをつけ^{つけ}て^てぬ^ぬ夫^{おつ}婦^めして
物もすがらるでさすりぬかして母^い死^し去^きり^り影^{かげ}さく
妹やいつきかれは夫婦大ようれひおもはらく
妹がれよかそりて久しく母の病^{やまひ}を^なる^まものらう

積りて、かゝる病とされるまゝと。夫ぬ或いひのりし
或いふすりしおよそ病をすくふとせむとせむと
まゝ心をうつしつゝいひをりたるが十とせむかりし
遂にすまりぬ。そのまゝめざりりのわんじらるる。
母人、涙を落せり。その外、弟もありたる。夫ぬ、
これをもつすること、こが子を養ふこととせむと
といふ。

○大朝村清十郎

清十郎、大朝村の久助がめ、つうぶものるり父の

伊三郎といひて、ふの民ありしが、眼をやまて、遂に
あつむなりければ、人の米をどつきあけがす
らふ世を、こつりたる。清十郎、うすれき、忠孝の
心ありて、まの志をたもつても、いふらひ、親の
やゝむし、まごかくむる。おまを、物くあつむ。こが
らふきものを、あけて、まが家、持ゆり。父より、
しむ。これの、聊その、餘りせらる。久助、母を、苦孝を、
あそれ。飯を、まてあつくる。久助も、その、誠、
かんで、渠、いづくたびも、親の、もとよ、ゆき、かよふ

ことをゆるしぬ。法子席の口時の折あり。人遊ぐとも
 されハ。あそび。年を終るまで。昼飯いとましく。臣
 子の務よ。方をつくせり。寛政五年。癸丑。正月十八日。
 米三たさ。らをたまさる。同一年己未。七月廿一
 日。あそび。前のごとく。下さる。

○土橋村道益同子松益

乃益ハ。土橋むらの庄左助。子あり。一が家。を
 牙。ゆづり。その身ハ。廣。ゆき。て。醫。を。す。ま。し。し。
 ゆりて。村人を療する。ま。術。も。く。り。く。人。を。す。ま。し。し。

こと。年。よ。ま。す。て。甚。以。ろ。し。貧。し。き。人。の。病。る。ま。り。一。き。ハ。
 情。を。か。け。て。つ。の。よ。茶。を。施。ぬ。く。ハ。大。抵。稻。つ。く。る
 の。こ。る。れ。ハ。秋。凍。の。際。よ。い。づ。り。て。糧。あ。ら。ず。や。む。し。の
 お。不。し。乃。益。秋。ご。と。よ。米。お。や。く。買。置。あ。く。る。年。妻。及
 の。以。時。の。價。より。ハ。引。く。づ。て。か。の。と。も。し。き。人。く。よ。
 ち。か。ち。づ。り。ぬ。これ。利。を。ゆ。ん。と。よ。い。あ。ら。ば。金。く。人。を
 す。く。の。心。より。出。づ。り。又。人。よ。錢。を。か。す。も。極。め。て。
 息。を。か。ろ。く。し。中。よ。い。息。つ。け。ざる。も。あり。天。竺。麥。の
 年。い。る。り。を。ひ。あ。く。て。う。の。里。も。も。困。む。し。の。お。不。

好生



かりき。乃益もとく。ふがいたるをい。のころは。券と
 かい。一。更。又。か。あ。て。る。子。松。益。も。父。が。志。業。と
 つぎ。て。家。を。居。て。い。孝。順。を。す。も。り。里。を。在。て。い。法。度。を
 あ。や。ま。ら。ず。と。い。い。庭。を。と。の。ふ。ま。い。居。さ。り。な。る。が。乃。益
 父。子。わ。ん。ご。り。と。い。と。い。へ。さ。と。い。て。善。行。を。な。す。ら。び。き
 ぬ。れ。が。里。民。も。多。く。て。さ。う。い。い。娘。一。ぬ。寛。政。五。年。癸。丑。
 十。一。月。十。二。日。父。子。を。銀。三。枚。賜。ひ。て。中。善。行。を。な。め
 ら。る。乃。益。と。と。一。六。十。八。松。益。は。三。十。八。と。り。ぬ。

○中祖村吉郎之傳

吉原吉原の幼より、継母もやいりれりる人となりて、深くその恩をおもひ、志をくも、とすことと、う近き年の母も老まより、孫も出来なけれ、家の傷を、あつらひて、母をやすらかな、任しめ、軽いとくより、食物を、すむつとめて、青きやうは、調へ、扱ひ、あすまを、あつくりて、こまか、風の、あうすを、あせぐ、母の、八十より、え、脚、あがつく、まり、くれ、い、渠も、六十、あまりて、頭、雪を、いた、きつ、寺、あ、負ひ、ゆく、さま、人、とて、かん、ぜ、ざる、もの、う、又、公の

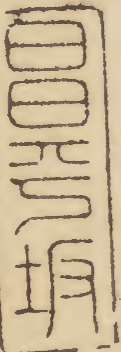
おきて、つ、その、も、てる、おの、田も、地、と、あ、けれ、と、貢を、ゆる、い、つ、も、か、ぎ、り、よ、う、き、だ、つ、と、や、一月、む、かり、も、ち、や、と、う、ん、乃、益、と、回、日、よ、米、三、俵、た、す、あ、て、な、う、び、せ、ら、れ、ぬ、

○有田村 怡仙

怡仙、家、ハ、六、代、の、業、を、業、と、て、耕、作、も、る、う、る、怡、仙、幼、年、より、母、を、う、う、ひ、継、母、も、育、ら、る、性、孝、う、て、親、も、く、つ、う、父、死、し、て、後、も、継、母、の、恩、義、を、お、も、ひ、て、い、よ、く、ま、い、と、を、尽、し、ぬ、継、母、も、年、老、れ、バ、怡、仙、一

一不心をつけ、飲食もかならず、うろろして食しむ。
 もし母の口よかなるをば、れいごうら垣梅してすむ。
 常すも、外よりづる時、もまづ母よ、申うし、その許をせ
 申ちて、はゆく、申病家より、すくよ、他へゆく、よあれい
 かならぬ人をかゝして、そのよしを、母よつく、ゆれい、をやく
 母のあゝ出て、そのさきづくの、ことを語り、すく病家
 るどまて、珠しきものを、ゆるさ、とあれい、おかつりて、
 母よ、ある、異母の、弟妹とも、ありれ、て、さか、嫁娶させ、る。
 これ、その孝、れ、大、醫、まり、又、療、治、も、ひろく、す、ぬ、る、が、

あまぬく、源、切、り、て、貧、人、より、謝、儀、も、う、け、ぎ、る、の、い、
 る、ら、ず、鉢、穀、を、あ、て、て、賑、一、郵、む、も、ま、さ、す、く、さ、
 から、ず、寛、政、九、年、十、二、月、八、日、銀、貳、枚、た、ま、い、る、怡、仙、
 時、よ、ど、一、日、十、八、日、と、と、と、



藝備孝義傳二編卷三終

三十一卷二系

卷三

三十一

此書之體裁與前書之體裁不同
 其體裁之異者一曰其體裁之異者
 二曰其體裁之異者三曰其體裁之異者
 四曰其體裁之異者五曰其體裁之異者
 六曰其體裁之異者七曰其體裁之異者
 八曰其體裁之異者九曰其體裁之異者
 十曰其體裁之異者十一曰其體裁之異者
 十二曰其體裁之異者十三曰其體裁之異者
 十四曰其體裁之異者十五曰其體裁之異者
 十六曰其體裁之異者十七曰其體裁之異者
 十八曰其體裁之異者十九曰其體裁之異者
 二十曰其體裁之異者二十一曰其體裁之異者
 二十二曰其體裁之異者二十三曰其體裁之異者
 二十四曰其體裁之異者二十五曰其體裁之異者
 二十六曰其體裁之異者二十七曰其體裁之異者
 二十八曰其體裁之異者二十九曰其體裁之異者
 三十曰其體裁之異者三十一曰其體裁之異者
 三十二曰其體裁之異者三十三曰其體裁之異者
 三十四曰其體裁之異者三十五曰其體裁之異者
 三十六曰其體裁之異者三十七曰其體裁之異者
 三十八曰其體裁之異者三十九曰其體裁之異者
 四十曰其體裁之異者四十一曰其體裁之異者
 四十二曰其體裁之異者四十三曰其體裁之異者
 四十四曰其體裁之異者四十五曰其體裁之異者
 四十六曰其體裁之異者四十七曰其體裁之異者
 四十八曰其體裁之異者四十九曰其體裁之異者
 五十曰其體裁之異者五十一曰其體裁之異者
 五十二曰其體裁之異者五十三曰其體裁之異者
 五十四曰其體裁之異者五十五曰其體裁之異者
 五十六曰其體裁之異者五十七曰其體裁之異者
 五十八曰其體裁之異者五十九曰其體裁之異者
 六十曰其體裁之異者六十一曰其體裁之異者
 六十二曰其體裁之異者六十三曰其體裁之異者
 六十四曰其體裁之異者六十五曰其體裁之異者
 六十六曰其體裁之異者六十七曰其體裁之異者
 六十八曰其體裁之異者六十九曰其體裁之異者
 七十曰其體裁之異者七十一曰其體裁之異者
 七十二曰其體裁之異者七十三曰其體裁之異者
 七十四曰其體裁之異者七十五曰其體裁之異者
 七十六曰其體裁之異者七十七曰其體裁之異者
 七十八曰其體裁之異者七十九曰其體裁之異者
 八十曰其體裁之異者八十一曰其體裁之異者
 八十二曰其體裁之異者八十三曰其體裁之異者
 八十四曰其體裁之異者八十五曰其體裁之異者
 八十六曰其體裁之異者八十七曰其體裁之異者
 八十八曰其體裁之異者八十九曰其體裁之異者
 九十曰其體裁之異者九十一曰其體裁之異者
 九十二曰其體裁之異者九十三曰其體裁之異者
 九十四曰其體裁之異者九十五曰其體裁之異者
 九十六曰其體裁之異者九十七曰其體裁之異者
 九十八曰其體裁之異者九十九曰其體裁之異者
 一百曰其體裁之異者

